

【講演の要旨】

演 題：「ニセコリゾートの広域連携として目指すべき方向（姿）について」

～ニセコリゾートビジョンと『ニセコ倶知安リゾート協議会の運営』～

講 師：原 重一氏 （観光開発プロデューサー：原 重一観光研究所 主宰）

＜3000m の上空から俯瞰すると・・・＞

コンドミニアム建設に代表されるこの地域への国内外ファンドの流入が、最終的に倶知安町民、ニセコ町民に幸せをもたらす地域開発、地域振興につながるのか、真剣に考える時期に来ている。

まちづくりについて考える前に、専門家の視点から町のこと全体を見ること、町の国際化についての情報（事実、提案、提言）を整理することが必要だ。

＜ビジョンがビジョンとして「真の共有目標像」になるために＞

国の事業の中から地域に必要なものをタイミングよく活用することが大事。そのためには住民の代表者で構成されている両議会の承認を得た分かり易いビジョンと、それに基づくマスタープランが必要だ。

「ニセコ倶知安リゾート協議会」をニセコ町と倶知安町だけでない広域型観光活動組織とするために、名称を「ニセコ羊蹄山麓地域観光リゾート協議会」のように変え、今後他の関係自治体、事業団体にも入ってもらえるよう門戸を広げておいた方が良い。さらに、既存の(株)ニセコリゾート観光協会や倶知安観光協会、行政の観光部門や観光担当職員を将来的には一元化した方が良い結果を生むだろう。

＜観光地づくりとまちづくり＞

観光まちづくりとは、地域に必要な人材を育成しながらプロジェクトを育てること。

例1）富士河口湖町の観光地づくり（「地域観光プロデューサー事業」制度）

例2）阿寒湖温泉の温泉観光地再生計画

いずれも観光地としては成功したが、住民にとって良い町になってきたのかという点が課題。リゾートの場合は、住民生活とリゾートライフとの共通点、相違点を考慮したうえで、観光地まちづくりを具体化していくことが大切。

＜組織と活動＞

「ニセコ倶知安リゾート協議会」は限られた人材と資金のなかで何をするつもりなのかもっと明確にする必要がある。事業の目標、内容を決定し、代表理事と事務局長のコンビネーションで推進していけるかがポイントとなる。

90年代後半以降、国際的なコンベンション&コンGRESの時代（事務局注：会議、大会などを開催し、そこで生まれる交流、情報交換を通じて経済、文化の振興、国際化を図る

もの。)が到来し、既存の観光協会や行政、観光関連団体をひとつにまとめ、事業内容も幅広い、コンベンションビジターズビューローという新組織が設立された。

人材育成を組織の大きな柱の一つとし、(財)沖縄観光コンベンションビジターズセンターや(財)東京観光財団はトップに観光のプロ、すなわち経験者を選んでいる。

<当面の大事な三つの仕事>

「ニセコ倶知安リゾート協議会」の門戸を広げるために名称を変え、各行政の長、議会の長、農協の理事長に入ってもらおう。

- ・ビジョンを具体的にする作業をもうワンラウンド行い、観光・リゾート事業のための土地利用と交通計画を策定する。民間中心の観光リゾート協議会が計画素案を策定主体として最適な組織。

- ・プロモーション、マーケティングを任せるため、専門家など人材を誘致する。

- ・ふさわしい人材育成が急務。地域住民、外部専門家の再教育と同時に、この地域に必要な人材を養成する専門性の高い学校、塾を作る。「事業は人なり」